

「黒人身体能力」に対するアメリカ人の認否のダイナミクス

―「人種」／「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に―^①

川島 浩平

序にかえて―比較文化的視点と「認否のダイナミクス」

二〇一〇年二月、カナダ、バンクーバーでの冬季五輪大会が開幕した。序盤で、金メダル候補として期待の中心にあったモーグル選手上村愛子の秀美なる滑走が惜しくも四位に終わると、日本列島全体が嘆息に包まれたかのようであった。^②上村を凌いだ上位三者はいずれも堂々たる体躯の持ち主で、筋力トレーニングで鍛え上げた上村の身体でさえ、比較するとやや華奢に見えたほどである。^③「上村は、もともとガタイのちがう選手を相手によく闘った」と、彼女の健闘をたたえる声をしばしば耳にしたのは、おそらく筆者だけではないだろう。ほぼ時を同じくして、運動能力の先天的優位を決定づけるとされる「金メダル遺伝子」の存在に好意的・肯定的な姿勢を印象づける特集番組が放映された。その内容は、先天的にヒトの運動をする能力や可能性を規定する遺伝子の探究が、一つの確証ともいえる手ごたえをつかみつつあるかの印象を伝えるものであった。^④

かくして私たちは再び、大規模なスポーツ競技大会が開催される度に活況を呈することになる、本質主義論の言説空間に身を置くことを余儀なくされている。^⑤二〇一〇年二月の後半に差しかかろうとする今現在も、諸説喧しい。いずれも、ある人種に生得的、遺伝的な運動・身体能力の存在を肯定する人種主義に加担しようとする点で、積極的である。

本論は、こうした世論の動向にささやかな抵抗を試みるべく立ち上げた研究調査の一部を報告することを目的とする。その詳しい内容は、別の機会で論じたとおりである。^⑥ここではその特徴として、次の点のみ指摘しておきたい。すなわち、「黒人」^⑦と呼ばれる人間集団に固有の運動能力があるとする想定を、その科学的根拠が存在しないにもかかわらず一つの言説として広く受け入れられていることを根拠に「神話」として規定し、この神話が出現し、伝播してきた経路を、以下に説明する二つの立場からの分析を通して解明する作業であるということである。換言するならばこの作業は、「黒人身体能力神話の浸透」^⑧「歴史的、文化的に構築された現象」に生得的、遺伝的根拠があるとする想定を誤謬を暴き出す営為にはほかならない。

上で述べた二つの立場の第一は、「神話」の浸透を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から、とりわけスポーツ大国として、これまで多くの黒人アスリートを生み出したアメリカ合衆国の占める役割と位置に注意を払いつつ、明らかにしようとするものである。^⑨そして第二は、「神話」の浸透におけるすぐれて日本的な、つまりにグローバルな水準に照らすと日本においてきわめて無批判に「神話」が受容される状況に注目する立場である。^⑩

第二の立場に立つ調査の成果を、筆者はこれまで幾度かに分けて発表してきた。まず、問題の所在を明示するために、「黒人」「身体能力」「神

「話」などの主要概念に定義を与えると同時に、文献調査や意識調査の結果を紹介し、日米間の神話に対する意識や態度の差異の度合を明らかにした。その差異を要約するなら、「アメリカにおいては、黒人が固有の運動能力、あるいはそれより広い意味での身体的な力を有するかどうかをめぐって世論が、三対七から五対五の割合で分裂し、他方日本においてはそれが争点たりえず、むしろ所与の想定として、半世紀近くに渡って安定的に維持されてきた」ということになる¹⁰⁾。次に、研究調査の方法論を詳述し、日米のインフォーマントに対するアンケートと聞き取りの結果に基づいて、日本で神話が無批判に受容される過程を説明するために検討すべき経験領域として、「一実際の「黒人」との遭遇、二「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得、三これらの言葉・概念の公的教育カリキュラムによる学習、四「神話」を支持するに至った契機と体験の四者を設定した¹¹⁾。さらに、第一の経験領域に関して、その経験が、身体能力神話とは縁の浅い領域で展開していることを検証することによって、神話の起源を現時点での日常生活にはなく、過去に遡って、年少期からの生育過程に求める必要性を確認した。

本論は、本論とほぼ時期を同じくして執筆にあたった論文の対をなすものとして構想されている¹²⁾。その論文が、右で述べた第二の経験領域、すなわち「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得」に関する日本人インフォーマントの経験を、アンケートと聞き取りの結果に基づいて掘り起こしたものであるのに対し、本論は同じ領域のアメリカ人インフォーマントの経験を組上に載せ、分析を試みるものである。日本において神話がきわめて無批判に受容される原因を説明するには、比較文化的な枠組の中で、相対的な観点からインフォーマントの経験を

考察することが有効であることはいうまでもない。このような考察を実現するための一つの段階として、本論では、第二の経験領域に関するアメリカ人インフォーマントの証言を精査するものとした。

しかし同時に、「黒人身体能力」に対するアメリカ人の認否のダイナミクス」というタイトルが示唆するように、本論にはもう一つの役割を期待している。すなわちそれは、神話に対するアメリカ社会特有の「認否のダイナミクス」が生成される過程を究明する作業と関わるものである。なぜ、過半数以上のアメリカ人インフォーマントは、かくも神話から距離を置き、批判的なスタンスを構築し、これを維持してきたのか、あるいはそうできるのか。神話に批判的な人々と、神話を支持する人々は、いかにしてそれぞれの立場をとるに至るのか。それぞれの立場を築く上で根拠になる経験とは何なのか。より端的に言うなら、神話に対する認否は、なぜ、いかに形成されるのか。これらの問いに答えを与えるためには、第二から第四までの経験領域に関するインフォーマントの証言を順次検討し、幼少期から青年期に至るまでの経験の動態を総合的に把握することが肝要である。

第二の立場からの調査とは、要するに、日米インフォーマントの証言に基づいて比較文化的な考察を試みる作業を横軸として、アメリカ人インフォーマントの経験を時系列でたどり、認否のダイナミクスの生成過程を説明する作業を縦軸として、二元的な分析をめざすものであるといえよう。本論はここでいう横軸の作業においては、先行論文と対をなすものであり、縦軸の作業においては、嚆矢として位置づけられるものである。

一 言葉・概念（「人種／黒人」）との遭遇とその習得についての記憶⁽¹⁴⁾

黒人身体能力神話、すなわち「黒人」として表象される「人種」に固有のものとみなされる運動能力があるとする想定⁽¹⁵⁾が成立するために、話者が、神話を構成する個々の言葉または概念の意味を理解し、使いこなせなければならぬことはいままでもない。とくに、「一定の共通性を有する個からなる集団」である「種」が人類にも存在するという了解の上に成り立つ「人種」と、その一つとしての「黒人」の二者は、神話が成立する前提として不可欠の言葉・概念である。インフォーマントは、いつ、いかにこれら二者と「遭遇」し、そしてそれを「習得」したのだろうか。

この点を検討するために、次のように考えてみたい。私たちは、この世に生を受けてから家庭や社会のなかで成長し、認知力や言語を獲得して発達させ、その過程で本論が焦点を置く「人種」や「黒人」という言葉・概念に「遭遇」し、それらを「習得」するようになる。この遭遇から習得までの時期と経緯は、個人差があるとはいえ、幼年期から少年期までのある程度限定された期間に起こるものであることはまちがいない。この時期を特定するために、まず次のような具体的な経験を振り返ることから始めよう。

たとえばここに三歳の女兒がいる。この女兒は父親がごく自転車の後ろ席に乗って、近所の商店街を通った際に、店舗ではたらく一人のアフリカ系の店員をみつめて、こう語った。「黒い人がいるよ。どうしてそんなに黒いの。」この時の発言は、おそらく彼女が、「人種」はもろん

のこと「黒人」という概念も知らなかったことを示唆する。ある個人を見かけ、その人の外見が、その他大勢とは相当違っていることはわかった。彼女が抱いた違いの印象は、「黒い人」という表現に集約されている。彼女は違いの理由を、素朴に父親に尋ねたのであると推察できる。

あるいはここに七歳の男児がいる。彼はある時父親に向かって次のように切り出した。「僕ね、白人か黒人になるとしたら、白人のほうがいいや。だって黒人だとボクシングをやらなきゃいけないもの。」この発言には「白人」や「黒人」が登場する。彼はおそらく、テレビでマーシャルアーツ系の番組を視聴し、そこで闘う人々の肌の色に印象付けられたのである。彼はこの時、すでに「黒人」や「白人」という言葉・概念を習得している。この発言に、「黒人だとボクシングをやらなきゃいけない」というステレオタイプ、あるいは身体能力神話を受容する過程の初期の段階を見出すことも可能かもしれない。しかしこの時点で彼が、黒人と白人を「人種」というカテゴリーによって整理する能力を有していたかは不確かであり、おそらく有してなかったと推測できる。七歳は、「黒人」の習得は済ませていたが、「人種」とは未遭遇であった時期といえるかもしれない。

以上はいずれも日本で起こった実際のできごとに基⁽¹⁶⁾づいている。これは、幼年・少年期の認識の変化に一つの見取り図を与えるエピソードである。つまり、三歳児は「黒人」と「人種」いずれとも未遭遇、七歳児は「黒人」は習得済みだが、「人種」とはおそらく未遭遇、そのように位置づけることができるのである。もう少し一般化するなら、わたしたちは幼年・少年期を通じて、まず個人の差異を認識し、ある時点で個人間の差異の中に、集団的な差異があることを理解するようになり、

その集団に「黒人」や「白人」というラベルを貼ることを覚え、さらにはその差異を人種の違いとして理解し、表現するようになるという発達過程を描くことが可能であろう。

もちろん、アメリカにいとすれば、三歳児と七歳児は、おそらく異質な外見や特徴を有する他人に異なる反応を示すであろう。一般的にみて、「人種」や「黒人」という概念と遭遇し、これを習得する経験は、二つの国家の文化的、社会的枠組の中で、異なる軌跡を描くであろう。たとえば、以下でみるように、日本人インフォーマントの経験では、「人種」のほうが「黒人」より「遭遇」と「習得」の時期が遅れる傾向があるのに比べ、アメリカ人インフォーマントの経験では、両者がほぼ同じ時期に発生しているということがわかつている。こうした、異なる軌跡の全体像を掘り起こすことこそ本論の目的にほかならず、そのために、概念を次のように定義し、アンケートの質問を次のように設定する。

まず、「遭遇」とは、二つの言葉が理解語彙として成立した時点を指し、「初めて聞く」経験に該当するものと定義する。他方、「習得」とは、二つの言葉が表現語彙として成立した時点を指し、「初めて使う」経験に該当するものと定義する。インフォーマントが経験した、「人種」と「黒人」という概念それぞれとの遭遇とその習得のタイミングを推定するための具体的な問いは、以下の四者である。すなわち「人種」／「黒人」という言葉・概念を導入し、その認知度を確認するために、「人種」／「黒人」という言葉を聞いたことがありますか、遭遇の時期を特定するために「初めて聞いたのはいつですか」、次に「聞く」から「使う」に視点を移して、「人種」／「黒人」という言葉を使ったことがありますか、習得の時期を特定するために、「初めて使ったのはいつですか」で

ある。二つの概念との遭遇とその習得の際の文脈や環境を特定するための具体的な問いは、「人種／黒人」という言葉を初めて聞いた／使ったのはどういう状況でしたか」である。

右で述べたように、本論の目的は「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得」に関するアメリカ人インフォーマントの経験を、アンケートと聞き取りの結果に基づいて掘り起こすことである。しかしここで注意しなければならないのは、アンケートと聞き取りで明らかにできるのは、過去における現実としての遭遇や習得ではなく、あくまでもそれらについてのインフォーマントの記憶に過ぎないということである。記憶に埋め込まれている「人種」や「黒人」との遭遇およびその習得の経験は、記憶の黎明期とでも称すべき、幼少期に起きたものである。一九歳から二二歳までのインフォーマントの、この時期に関する記憶がどれほど正確かについては、留保が必要である。実際アンケートでは、「覚えていない」とする回答や、無回答も少なくない。聞き取りでその点について繰り返し尋ねても、「思い出せない」とする場合や、しばらく考え込んでから、ようやく、搾り出すように記憶を語る場合などもある。

しかしそれでも、インフォーマントの記憶と語りに基づいて行う調査には十分信頼するに足る根拠が存在する。その根拠とは主として次の三点である。

第一に、「人種」／「黒人」との遭遇とその習得という経験は、日米いずれの社会においても、比較的鮮明に記憶に残る可能性が高いということが出来る。歴史家トーマス・ゴセットはその著書の冒頭で、幼少期に初めて人種主義に直面した時の経験を活写しているが、彼の記述は、

人種に関する記憶が、たとえ幼少期に由来するものであったとしても、晩年まで保持されることを示す好例であるといえよう。¹⁸⁾ インフォーマントはみな一九歳から二二歳であり、幼少期の出来事がお正確に記憶されている可能性は決して低くない。実際インフォーマントの語りには、確信や断言を伴うものも少なくない。

第二に、たとえ不正確な記憶であっても、聞き手とのやりとりを通じて、ある程度記憶を呼び戻すことは不可能ではないと考える。調査者が実際に試みた手段の一つに、アンケートに記載された事項に関して、聞き取りで繰り返し、異なる角度から質問し、語り手の表情、話し方、その内容などから確かであることを、聞き手側の手ごたえとして掴み取るというものがある。むしろこの手ごたえは主観的な感覚であり、客観的な保証がないことはいうまでもない。それでも、調査者がインフォーマントに対して、慎重に回想するように、そして可能な限り正確なものとなるよう繰り返し依頼したことの効果は少なくないことを期待したい。

第三に、以上の二点が、インフォーマントの記憶の正確さを保証するものではないにせよ、記憶というレベルでの分析と比較から学べるものは少なくない。現時点における黒人身体能力神話に対する態度が形成される過程を解明するために、過去の経験に関する記憶の正確さを問うことをひとまず置き、現在どう記憶しているか、つまり記憶の在り方そのものを手がかりとして検討したい。以下で明らかにするように、日本人とアメリカ人それぞれのインフォーマントの記憶には際立ったパターンがあり、興味深いことに、両者の間には顕著な差異が存在する。この差異を、神話の受容度に見られる比率的な格差をもたらす過程の、出発点における条件の質的な相違として提示したい。本節は、慎重に紡がれた

記憶を結ぶ共通性が全体として提示するパターンには、神話受容度に見られる日米間格差の原因を解明する手がかりがあるとの前提に立つものとする。

本節を締めくくるにあたり、次節でアメリカ人インフォーマントの経験を検討するに先立って、日本人インフォーマントの証言から明らかにした遭遇と習得の時期と状況を、次の五点としてまとめておこう。

第一に、「聞いた」経験にせよ「使った」経験にせよ、その有無を尋ねた場合、「黒人」の場合は、「人種」の場合よりも無回答や「わからぬ」との回答が少なくない。¹⁹⁾ これは「黒人」のほうが「人種」よりも一般に普及し、日常的な会話で聞かれたり、使われたりする頻度が高いことを示唆する。インフォーマントが生育した環境において、「黒人」のほうが「人種」よりも普及し、流通していたということであろう。²⁰⁾

第二に、「聞いたことがある／使ったことがある」経験は、「黒人」のほうが「人種」よりも相対的に早い時期に発生している可能性が高い。「黒人」との遭遇とその習得は、多くのインフォーマントが小学校を終える時期までに済ませていたようであるのに対し、「人種」の場合は、多くのインフォーマントが中学校時代まで待たなければならなかった。²¹⁾ 言い換えるなら、「黒人」との遭遇とその習得を通じて、この言葉が表象する人間集団の存在を意識するようになってしばらくしてから、「人種」という言葉・概念と遭遇し、これを習得するのが、日本人インフォーマントに一般的な経験であるといえるだろう。

第三に、「人種」との遭遇とその習得が発生する状況に関する回答は、時期に関する回答よりも具体的で明瞭な情報を伴うものが多い。「人種」との遭遇に関する記憶からは、「教室」が共通するイメージとして浮か

び上がる。「聞いた」にせよ「使った」にせよ、ほとんどのインフォーマントは、その経験が発生した場所が「授業」あるいは「教室」であったと答えている。⁽²²⁾

第四に、「黒人」とこの遭遇とその習得がなされる状況に関する回答では、「人種」と比較した場合、はるかに多様な情景描写がなされ、様々なイメージや表象が行き交い、また構築されている。しかしここでは、肯定と否定、積極と消極、ポジとネガなどとして対置しうる好悪感情の交錯も発生している。つまり、正負一方向に集約しきれない異質な要素が混在する状況が成立していたと思われるのである。そこに投影される黒人イメージの基調に潜むのは、スポーツ競技での卓越と栄光、それらに対する憧れ、羨望、好意であると同時に、実際の人間関係、つまり家族の歴史に蓄積されてきた記憶と価値観や、家族および友人とのやりとりなどで学んだ、地域社会のネットワークに根付く閉鎖性、隣人としての接触で生じる違和感など、対立し、矛盾する印象、意見、判断、評価などの共存である。⁽²³⁾

第五は、こうした混在や共存の状態が、ある特定の方向に収斂されるかたちで解消されない理由に関わるものである。つまりそれは、「黒人」を語り、それを聞く状況における、話者と黒人との間接性と距離感である。ほとんどの語りにおいて、当の黒人は、より親密な関係を築き得る環境に存在せず、相互理解を促すような接触が生まれる可能性は欠如している。メディアで映し出されるスポーツ選手や芸能人は実在感の希薄な遠い存在であり、家族や友人の語りに登場する黒人もまた「ちびくろサンボ」や「土人」など記号的な意味合いが強い場合が多い。「実際に見て」あるいは「隣人」として黒人を意識する場合でさえ、近しい存在

として言及されている例は皆無に近い。こうした、内実ある経験を提供する機会が欠如した状況では、もし制度的なシステムによってステレオタイプが生産された場合、それに対抗する知が作動し得ないのも当然であるといえよう。⁽²⁴⁾

二 アメリカ人インフォーマントの経験

1 遭遇と習得の時期

アメリカ人インフォーマントの「人種」概念との遭遇における、日本人インフォーマントの場合との顕著な違いの一つは、二人すべてが「人種 (Race)」という言葉を用いたことがある、「使ったことがある」と答えていることである。これは、多民族、多人種な国家であり社会であるアメリカにおいて、この概念が、私たち日本人の常識では計れないほど、広く浸透していることを示唆している。もう一つの違いは、「聞く」「使う」いずれの場合も、「小学校以前」、「小学校前半」、または「小学校後半」とする回答の比率が高いことである。「人種」を表現・理解語彙として獲得した時期が小学校かそれ以前であったとする回答者は、優に半数を超えている。⁽²⁵⁾多くのアメリカ人インフォーマントは、多くの日本人インフォーマントが中等教育のカリキュラムを通じて初めて理解した概念と、それよりずっと早期から遭遇し、これを習得していたのである。

「黒人」概念との遭遇とその習得の時期についても、類似した傾向を確認できる。二人すべてが「黒人 (blacks)」という言葉を用いたことがある」と答え、二〇名が「黒人」という言葉を「使ったことがある」と答えている(「黒人」の使用について一名は「わからない」と回答)。

遭遇と習得の時期については、「聞く」「使う」いずれについても、「人種」の場合よりもさらに高い比率の回答者が「小学校以前」、「小学校前半」または「小学校後半」と答えており、インフォーマントが、初等教育の終了時まで「黒人」概念に習熟していたことを推察させる。⁽²⁶⁾

アメリカ人インフォーマントによる「人種」と「黒人」それぞれの概念との遭遇とその習得の時期についての特徴を、日本人インフォーマントの経験と対比しながらまとめると、次のようになる。第一に、「聞く」にせよ「使う」にせよ、無回答や「わからない」と回答するものの数は、非常に少ない。それは、「黒人」を使ったことがあるかどうかを「不確か」とした一名のみだった。第二に、アメリカ人インフォーマントの多数派は、「人種」と「黒人」のいずれとも、日本人よりもかなり早く、小学校を終えるまでに遭遇し、これを習得している。そして第三に、この時、日本人のように明らかに「黒人」を対象とする遭遇・習得経験の方が早いとは言えない点に留意しなければならない。つまり、アメリカ人インフォーマントは「人種」と、「黒人」と同等か、あるいはそれ以上の頻度で遭遇し、これを習得してきた可能性が高いのである。このことは、後に論じるように、アメリカ社会における人種主義や人種差別 (racism) との対峙や対決といった政治文化的な文脈の重要性および、それに関する意識の芽生えの早さを反映しているものと思われる。

それでは、こうした特徴が意味するもの、あるいはその影響とは何であろうか。アメリカ人は日本人よりも早い時期（小学校前から始まり小学校卒業までに終了）から「人種」と「黒人」に遭遇し、これを習得する可能性が高く、それぞれの概念に関する遭遇・習得の時期に大きな差異は認められない。アメリカにおける遭遇と習得が、比較的早期から、

そしてほぼ同時に進行している可能性は、「人種」に対する意識が（日本に比べて）相対的に高いことを示唆するものである。彼の地の子供たちは、物心つくころより、あるいはそれ以前からこれらの概念に接触し、同時進行的あるいは相互補完的に両者に対する認識を確立したと思われる。黒人身体能力神話に対するアメリカに特有の認否のダイナミズムが形成される過程を究明するために、手がかりを与えるものとしてこの点に留意したい。

2 遭遇の状況―「人種」の場合―

この点を検証するために、遭遇と習得の状況に視点を移したい。まず目につくのは、「授業で」と答えるものの比率が相対的に低い点である。回答者二一名中、「授業で」としたものは、「人種」を初めて聞いた」七名、「人種」を初めて使った」一名、「黒人」を初めて聞いた」四名、「黒人」を初めて使った」六名であつたに過ぎない。日本において学校という公式な教育環境において学習すべき概念は、アメリカでは、家族や友人といった学校の教育カリキュラムの外側、あるいは物理的な学校環境そのものの外側で展開する人間関係の中で概ね遭遇・習得されているようなのである。⁽²⁷⁾

「人種」概念を「聞いた」とする状況のうち、「授業で」と答えたもの七名以外をみてみたい。その中には「友人から」とする七名、「家族から」とする三名、「覚えていない」とする三名が含まれる。

「友人から」とする一人ロザリンはこう語る。

（「人種」という言葉を聞いたのは）絶対に一〇歳より前です。そ

これは確かです。幼稚園か、小学校一年生の時くらいでした。「人間
の種」、「世界には様々な人種がいる」、「そういった意味での人種が
何かを知ったのは、幼稚園や小学校の友人、あるいは近所に住む人
に、人種的アイデンティティの異なる人がいたからだと思います。
とくに、仲の良かったアジア系の女の子のことを覚えています。
「人種」という言葉を初めて聞く機会があったのは、おそらくその
ころのことだったと思います。それから、人種的な違いについて最
初に考えたきっかけといえば、おそらく幼稚園か一年生の頃だと思
いますが、私たちの中に、見た目のちがう子がいました。「それは
どうしてか説明しなさい」とって、先生に聞かれたときです。

ロザリンの経験にみられるような、初等教育において互いの違いを認
め、理解するよう促す指導は、インフォーマントたちが幼少期を過ごし
た一九八〇年代後半から九〇年代前半に（そして批判を浴びつつ現在ま
で）教育界に強い影響を与えた（与えている）多文化主義によるもので
ある。別の機会に詳しく検討することになるが、他のインフォーマント
も同様に、一つの世代の通過儀礼であるかの如く、多文化教育の洗礼を
浴びて育っている。

ここでは話を本筋に戻して、やはり「友人から」「初めて『人種』を
聞いた」とするマシューの証言に耳を傾けたい。フィリピン系の母親を
もつマシューも、エスニシティの異なる友人との出会いがきっかけだっ
たと指摘し、こう語る。

初めて「人種」という言葉を聞いたのを、思い出せる限りでいえ

ば、小学校一年生のときです。友人や先生から、よく「君の背景
(Background)は何？」という質問を受けました。その時、「人種」
という言葉も使われ、意識したのではないかと思います。「エスニ
シティ」というのは、どちらかというポリティカルコレクトネス
(PC)のための、硬い表現でした。私の育ったカリフォルニア州
バークレーは、とてもPCの雰囲気が強いところでした。ロサンゼ
ルス暴動が発生した一九九〇年代の初頭、それから九〇年代を通し
てそうだったと思います。でも二〇〇一年の同時多発テロ以来、ず
っと愛国的な雰囲気になりました。

マシューは、小学校初期の級友や教師とのやりとりの中で、しばしば、
自分のアイデンティティについて「背景」という言葉で説明するよう求
められ、その時に「人種」が使われるのを耳にしたのではないかと想起
するわけである。

ロザリンとマシューの記憶に共通するのは、たとえ友人が「人種」と
いう言葉を口にするのを聞いたとしても、その場所が教室である可能性
が高い点である。これに比べ、エドワードの語りは、もう少し広い社会
的な文脈における友人との交流を思い浮かべている点で、やや趣を異に
する。

エドワードは語る。

「人種」を初めて聞いたのは、おそらく友人とのやりとりでは
なかったかと思えます。その場には誰かを描画しようとする時
の言葉として、聞いたのではないかと思います。あの「黒人」の子

とか、あの「背の高い黒人の子」とかいふ表現についてきたのではないでしょうか。年をとるにつれて、社会的な文脈についてもっと敏感になりましたが、子供のころはそうではなかったと思います。

南部ノースカロライナ州生まれのエドワードにとって、人種の異なる子供との接触は、日常的な出来事であったと思われる。日常茶飯事的な異人種間の交流において、その場にはない他者に言及する状況であったにせよ、「人種」が口にされ、耳にされたことが容易に想像できる。ただし、年齢を重ねると共に「人種」が公然と使えない言葉であることを知り、語彙の選択に慎重になったと、エドワードは回想するのである。

ノースカロライナ州から遠く離れた、北部コネティカット州に生まれ育ったラファエルにとっても、「人種」は無縁の言葉ではなかった。ラファエル曰く、「幼稚園の時、黒人の級友がいました。彼は、おそらく私が最初に出会った黒人でした。その状況をはっきりと思い出すことはできません。あまり深く考えたことはありませんでした。たしか一年で幼稚園を辞めました。もしかしたら態度がよくなかったからかもしれません。」ラファエルの状況は、数人の日本人インフォーマントが経験した黒人の転校生を迎える状況に、むしろ類似しているようである。²⁸

以上四者の証言は、「人種」を聞くという直接的な経験を記述するのではなく、その経験が発生し得た状況を想起し、その中で「人種」を聞いた可能性が高いことを示唆しているに過ぎない。その中で、これらの証言は、「聞く」という行為の状況証拠に止まっているといふべきかもしれない。これに対し、日本人を両親に持つユカコの次の語りは、「人種」という言葉を、人種主義・人種差別 (racism) との関連で「聞いた」の

ではないかとしている点で、より直接的かつ具体的な根拠を提示している。その意味では、「人種」を耳にする契機への新たな視角を開くものであるといえるだろう。ユカコ曰く、

小さいころは、「人種主義者 (レィシスト、racist)」の正確な意味を理解していなかったと思います。それでも、小さかったとはいえ、人種主義 (racism) が望ましくないものであることは知っていました。そして大きくなるにつれて、その意味について考えるようになりました。この言葉を聞いたのは、人種的な違いとは直接結びついていないジョークの中でした。私は隣の犬がきらいだったので、級友にそう言うと、「あなた、犬に対してレィシストね」って叱られました。それで「偏見をもつ人」のことだとわかったので。そのあとの記憶といえば、八歳か九歳のころだったと思いますけど、授業でジャッキー・ロビンソン²⁹を取り上げたことがあって、その時の友達との話で「人種」を聞いたと思います。

ユカコの証言は、タブーとしての人種主義がアメリカ社会に落としている暗い影を垣間見せるものでもある。多くの場合、この問題を抜きに「人種」を語ることができないといっても過言ではないかもしれない。マッシュューと同様、ヨーロッパ系の父親とアジア系の母親を持つジャックの次の言葉は、この点を裏付けている。

外見が普通の子供たちと違うので、私は「お前、養子だろう」とよく言われました。父が散歩しているのを見た友人には、「あの人

がお前のお父さん？うそだろ？」とも言われました。幼い頃はこうした問いに傷つき、どうして自分だけがこんなことをいわれなければならないのか、ずいぶん悩みました。しかしやがて、白人が多数を占める地域に住むマイノリティの誰もが経験する問題であることがわかってきました。「人種」という言葉の定義を学校で教わったりしたわけではありません。しかしそれは常に潜んでいました。私は授業で「自分がだれで、どこから来たのかを話し合おう」と言われるのがいやでたまりませんでした。みんなから疎外された気持ちになるからです。

人種主義が、アフリカ系市民にとってなお一層深刻な問題であったことは想像に難くない。アフリカ系は、歴史的にみて、そして規模の点で、人種主義による最古にして最大の犠牲者であるといわれる。⁽³⁰⁾人種主義に対するタブーの意識は、アフリカ系の人々にとってさらに強いものであったにちがいない。

「人種」を「家族から」聞いたと答えた三人には、アフリカ系男女のインフォーマント二人が含まれている。いずれも、「人種」を聞く機会が、家庭という最も私的な領域において、身内だけ、あるいはごく親しい者同士に限られた空間で与えられた様子を語っている。その一人アンソニーは、次のように述べる。

「人種」を初めて聞いたのは、おそらくとても小さいころです。両親に、人種について話してもらいました。二人のおかげで、それが何なのか、どんなものなのか、よくわかりました。それはたぶ

ん、テレビに出ている人とかそんなじゃなくて、知人が友人のように、私たちが知っている誰かについて話をした時だったと思います。

もう一人のアフリカ系、アンナの記憶はもっと明瞭かつ具体的で、ある意味では露骨でもある。アンナはこの時、厳しい現実には備えさせようとする母親に、自分への愛情だけでなく、母親自身の人種主義と闘う決意を感じ取ったのではなからうか。むしろこれを機に、彼女自身も醜い現実と向き合わなければならなくなった。アンナはこう語る。

とっても小さかったころ、おそらく四歳か五歳のころだと思えます。母がはっきりと「人種」について教えてくれました。母はとても率直な女性なんです。私は「『黒人』って何？」と聞きました。私の肌は、黒というよりも、茶色だからです。母は、「アフリカ系アメリカ人が黒人なのよ」と教えてくれました。社会がそのようにカテゴリーを造るんだって。私の両親はいつも人種について語っていました。だから、私はその言葉を聞かなかつたなんて考えられません。その場に家族以外の人を招いた夕食の席だったかもしれない。：学校の先生は「誰もが同じだ」って教えてくれました。でも家では、両親が、現実を違うことを教えてくれました。「先生は同じだっていうけど、本当はそうじゃないの、人は違うのよ、現実を直視しなさい」って教えてくれました。

3 習得の状況―「人種」の場合―

「遭遇」から「習得」へ、つまり「人種」を「初めて聞いた」経験から「初めて使った」経験へ視点を転じよう。日本人インフォーマントの語りでは、これら二つの経験の間に一定の時間的なズレが確認できた。理解語彙と表現語彙が成立する条件からみて、これは当然といえれば当然である。⁽³¹⁾しかしアメリカ人インフォーマントの場合、「初めて聞いた」状況を「初めて使った」状況と区別して記憶していることはまれで、それぞれを別々に語ったインフォーマントは少ない。たとえば「人種」を「友人に」「初めて使った」とするマシューとエドワードや、「家族に」「初めて使った」とするアンソニーとアンナたちの語りでは、それがおそらく「聞いた」よりあとかもしれないとの推測を挿入することはあっても、その内容は概ね重複している。これは、人種が話題になる状況において、聞き役と語り役という分業は成立しておらず、むしろ双方向的な意思疎通が実現していた可能性を示唆している。日本人インフォーマントが「人種」との遭遇において一般に受動的であったとしたら、アメリカ人インフォーマントは能動的になる、あるいはそうならざるを得ない確率が高かったようである。それは、多民族国家ならではの社会的要請がなせる業ではなかったか。

しかし少数ながら、「使う」という行為に力点を置いて語ってくれたインフォーマントもいる。「使う」ことにはこだわり、「聞いた」時に関する証言には見られない内容を披露してくれた二人は、スーザンとニックである。

イタリア系のスーザンは、「聞いた」記憶よりも「使った」記憶をより鮮明に保持していたようである。その理由は、小学校後半の自我の発

達を迎える時期に、友人と交流するなかで自己と他者の差異について熟考するようになったからである。彼女の次の告白は、この点を明らかにしている。

（初めて「人種」を使ったのは）小学校四年生くらいだったでしょうか。「初めて聞いた」時期よりも少しあとです。学校ではなかったことは確か。一つの特定の時点としては思い出せないけど、七歳から一一歳くらいまでのある時に突然、人種を意識するようになりました。そういう機会が急に増え、生活に溢れるように入ってきました。「どうして私たちはこんなに違うの」って思うようになり、そればかり考えていました。

ニューイングランド育ちで、ヨーロッパ系のニックは、「人種」を初めて使った記憶をたどりながら、慎重に口を開いた。

（「人種」を）まず聞いて、しばらくしてから、その意味を十分に理解していなかったかもしれないけど、使うようになったのだと思います。初めて使った時の状況を、具体的には思い出すことはできません。全般的な印象としてしか話せないけれど、おそらくマートイン・ルーサー・キング記念日か、「黒人史月間（Black History Month）」⁽³²⁾に、人種について、あるいは公民権運動⁽³³⁾について議論したことがあるから、その時だろうと思います。

先述の通り、「人種」との遭遇やその習得において、アメリカ人イン

フォーマントの方が積極的な姿勢をとったと思われるが、スーザンとニックの証言はまさにその傾向を裏付けるものである。

4 「人種」との遭遇とその習得—まとめ—

「人種」を初めて「聞く」・「使う」経験についてまとめておこう。日本人インフォーマントと比べた場合、アメリカ人インフォーマントの経験が際立っている点の一つは、教室での授業以外の場、たとえば地域社会や家庭を舞台として発生する機会が多いということである。もちろん、授業という場が重要でないわけではない。授業で「人種」と遭遇し、これを習得したとの証言も少なくない。しかし授業中であっても、日本人インフォーマントが教科書、資料集、用語集などの教材を出典として「人種」の定義を学習する（あるいは記憶する）場合が多いのに対し、アメリカ人インフォーマントは、授業での討論や教室での級友との対話を通じて、遭遇し、習得する機会が多い。換言するなら、学校では、教師が生徒に一方的に情報を提供する授業ではなく、教室を舞台とする双方向的なコミュニケーションの中で、そしてもっと多くの場合、地域社会や家庭で展開する緊密な人間関係のネットワークを通じて、アメリカ人インフォーマントは、「人種」概念に遭遇し、これを習得するといえるだろう。

「人種」との遭遇のお膳立てが、多くの場合、義務教育が始まる前から整っていることにも留意したい。アメリカ人インフォーマントの証言は、遭遇と習得の過程が、就学以前から始まっていることを示唆する。「人種」との付き合いの早期開始を必然なものとしているのは（むしろ地域によっては単一民族的な居住区も存在するので、普遍的ではないにせ

よ）、多民族国家の隅々にまで分布する人種的な「他者」の存在である。「どうして私たちはこんなに違うの」というスーザンの言葉にも窺えるように、多数のエスニック集団が混在する環境においては、個人のアイデンティティに対する感性が、日本人とは比較にならないほど研ぎ澄まされ、差別意識、優越・劣等感、葛藤など様々な内発要因によって、あるいは家族や教育者からの外発的な働きかけに促されて、自分が誰で、他者とどう違うかを説明する必要性に迫られるようである。差異を説明するカテゴリとしては、P.C. 的で硬い「エスニシティ」よりも、多文化教育の現場での「バックグラウンド」のような婉曲表現が用いられることを、マシューの証言は示している。しかし、インフォーマントの記憶を総合するなら、そのような場で暗黙に、あるいは公然と「人種」が流通し、彼ら／彼女らの人種意識を覚醒させたのであろう。

「先生は同じだっていうけど、本当はそうじゃないの、人は違うのよ、現実を直視しなさい」と語る母に触発されて、アンナは人種を境界とする集団間に「差異はない」という公的な言説（タテマエ）を放棄して、「差異がある」という私的な言説（ホンネ）を受け入れた。またユカコは、人種の差異に基づいて社会の秩序や構造に干渉するイデオロギーである「人種主義」という言葉を、その意味も解さないほどの幼少期から口にしてきた。いずれの経験も、アメリカでは日本人とは比較にならないほど早い時期から、人々が「人種」に関与させられることを示している。

人種主義の最古、最大の犠牲者であるエスニック集団に属するアンソニーとアンナは、アフリカ系市民が、現在なお直面しなければならぬ厳しい現実の一端を伝えている。アフリカ系の人々にとつて「人種」による因果は、この世に生を受けた瞬間に始まる。この集団の存在が、ア

アメリカにおける「人種」との遭遇とその習得の経験に、日本人が思い至らないような幅と深さを与えていることも忘れてはならない。

5 遭遇と習得の状況——「黒人」の場合——

「人種」から「黒人」に視点を移したい。すでに見たように、日本人インフォーマントと比較した場合、それぞれの概念との遭遇がほぼ同時に進行していることが、アメリカ人インフォーマントの経験に特徴的である。

聞き取りの際に、この点に具体的に言及している例もある。例えばアンソニーは、次のように語っている。

（「黒人」という言葉を初めて聞いたのは）「人種」を初めて聞いたのと同じころだと思います。そのころになって初めて、これらの言葉をしっかりと理解できるようになりました。それまでは聞いていても、理解してなかったのではないかと思います。僕には兄たちがいて、いっしょに友達の話なんかしているときに、かならず話題になりました。

バスケットボールの影響を重視するターニャも、同様の指摘をする。曰く、

（「黒人」という言葉を初めて聞いたのは）四年生か五年生のころ、「人種」を聞いたのと同じ頃だと思います。スポーツの話題が出た時だったのではないかと思います。なんといいってもマイケル・

ジョーダンです。私は彼をみて大きくなったようなものだからです。ジョーダンの家族は、私が育った街に住んでいました。私たちが街にすむ黒人の多くは、有名人です。

「人種」と「黒人」、それぞれとの遭遇時期が重なるのは、遭遇する状況で行われている会話において、両者が関係づけられながら話され、聞かれていたからであろう。日本人インフォーマントの場合、「黒人」という言葉が初めて聞かれる状況において、「人種」というカテゴリーが想起されることはあまりなかった。「黒人」は個人であり、ある意味で「特殊」な存在であった。その存在を全体の構成や構造のなかに、取り入れ、位置づける作業はそれほど必要とされなかった。⁽³⁵⁾ また逆に、「人種」という言葉が初めて聞かれる状況は、ほとんどすべてが学校の授業の場であり、この言葉は、辞書的な定義と共に、素直に学習されたのである。

対照的にアメリカ人インフォーマントの場合、「人種」は人間集団相互の差異を問う会話や対話の中で導入されることが多く、その状況において、「人種」は差異に意味を与えるカテゴリーであり、境界を引く基準の一つであった。「黒人」は、境界を引く行為によって特定される集団の一つとして意識され、言及された。したがって、こうした会話や対話および行為において、二つの概念がほぼ同時に呼び起され、話題にされるのは、当然といえば当然である。

こうした人間集団相互の差異の存在と、境界線を引く行為に対する関心や、それに伴う気持ちの揺れは、二人のインフォーマントの証言に表れている。ロザリンは、五歳前後の当時、アフリカ系の隣人と自分たちの容貌が違うのが気になり、それがなぜなのかを度々両親に尋ねたとい

う。彼女は、こうした人種的差異の原因を求めるやり取りの中に、「黒人」という表現を含む返答があったに違いないと言う。フィリピン系のマシューも、通行人や隣人の特徴や様子に関する両親との対話の中に、「黒人」が含まれていたのではないかと推測する。

もつとも、「人種」と「黒人」という概念の差異にもっと自覚的な発言がなかったわけではない。エドワードは両者を次のように区別する。「『人種』は学校で教わる硬い言葉だけど、『黒人』はそうではありません。ノースカロライナに育った私にとって、黒人かどうかは社会的にとつても大きな区別で、記憶の始まりと同じくらい早くから、理解し、身につけていたものだと思います。だから、幼なじみとの間で、当たり前のように聞いたり、使ったりしていた言葉のほずです。」（ここでエドワードの語る「人種」という言葉に対する印象は、日本人インフォーマントのものにむしろ近いといえよう。）³⁶ ジョージも、類似した発言をしている。教科書で「適正な」言葉として推奨される「アフリカ系アメリカ人」は、彼によればP.C的であり、仲間うちのことばが「黒人」だという。「教室では『アフリカ系アメリカ人』と教わるけど、仲間同士では『黒人』が当然の如く使われていました。」

また、「黒人」との遭遇についての語りでは、個人間の差異を集団間の差異に敷衍し、その上で集団間の関係を、差別・被差別の関係や上下関係として捉えた（捉えざるを得なかった）モーメントに関する記憶が、しばしば呼び醒まされたことにも注目したい。これは、「人種」との遭遇についての語りでは、みられなかったものである。

前出の、ヨーロッパ系の父親とアジア系の母親を持つジャックも、そうした語りをした一人である。野球少年だったジャックは、七歳の頃、

試合のために各地を飛び回っていた。ある時黒人居住区で試合があり、そこに行ったことを祖父に話すと、次のような調子で諭されたという。

「黒人」という言葉を初めて聞いた機会として覚えているのは、（父方）の祖父とのやりとりです。夕食の席だったと思います。父側の家族は人種主義者（レイシスト）でした。七歳くらいでした。祖父母と夕食をした時です。はつきりとは言われませんでした。しかし、繰り返しほめかされました。微妙な言い回しでこう言われました。「お前はあんな地区へ行ったのか。やめときなさい、そこへ行くのは。理由はわかるだろう…。」

大学生になってから、人種主義であったと想起する祖父の態度や発言の中に、自分にとつての「黒人」との遭遇があったにちがいないと、ジャックは主張するわけである。

しかしスーザンによれば、人種の差異に対する視線は、それを厭う差別的なものというよりもむしろ、あこがれと羨望を含むものであった。幼少期からバスケットボールに打ち込んでいた彼女にとって、その実践（プレイ）にみられる、人種的差異は常心的であった。黒人が有しているとされる「優秀さ」や「優越」に関する言説から、自分たちを断絶することは不可能だったようである。チームメイトとの会話や対戦相手とのやりとりの中で、身体的な能力の差異は必ず話題になったという。

三年から四年のころ、私はバスケットボールに夢中でした。うちから車で九〇分くらいかけて、父に送ってもらって、ダウンタウン

の練習に通いました。父は、週三回も送り迎えしてくれました。黒人の選手は、チームメートにも対戦相手にもいません。バスケットボールですから、当然といえば当然ですよね。だから、このころまでには必ず、この言葉を聞いていたはずですよ。授業では「アフリカ系アメリカ人」って呼びなさいって教わりました。でもコートでは、文脈がちがいます。「あの子は黒人よ」っていえば、あの子は「うまいわ」、「速いわ」ってことなのです。もちろんこれはステレオタイプですし、それに当てはまらない子もいました。しかし、それでも私たちはそう言い合っていました。

「黒人」を「初めて使った」状況、つまり概念を習得する際の状況についての語りは、「黒人」を「初めて聞いた」状況、つまり概念との遭遇の際の状況についての語りと、内容の点で、大きな差異はみられなかった。

6 「人種」・「黒人」との遭遇とその習得——まとめ——

以上より、アメリカ人インフォーマントによる「人種」・「黒人」概念との遭遇とその習得の時期と状況に関して、特徴的な点を次のようにまとめることができる。

まず、両概念との遭遇とその習得は、日本人よりも早期（その多くが小学校以前）から、同時発生的に進行した。「同時発生的」とする根拠は、インフォーマントの多くが、カテゴリーの概念として「人種」と遭遇し、「人種」カテゴリーによって区分される一つの集団として「黒人」と遭遇した状況を語っていることに求められよう。二つの概念との遭遇は、

一つがもう一つに付随するかたちで実現していたといえる。この時、「黒人」が「人種」に付随したのか、それとも「人種」が「黒人」に付随したのかは判定が難しい。しかし、二つが両存あるいは共存するかたちで、幼少期のインフォーマントの意識に導入されたことは確かなようである。前者の立場をとるなら、人種主義イデオロギーへの対抗・抵抗する知恵を育てる教育において、具体的な人種としてまず想起されたのが黒人であったであろうし、後者の立場をとるなら、身体的な差異を意識する（させられる）「他者」として黒人を位置づけ、区分・分類し、認識の枠組みに定位する際に不可避的に動員されたカテゴリー概念が「人種」であったといえよう。

これと関連して、アメリカ人インフォーマントの場合、遭遇と習得の状況を区別して記憶していることが少ない点に注意を促したい。「人種」と「黒人」いずれの場合も、遭遇と習得はほぼ同時に起きている。それを、遭遇と習得の契機における聞き役と語り役という役割分業の不成立、あるいは双方向的な意思疎通の成立という観点から説明し得ることは先述した。ここではさらに、遭遇時点で習得のレベルまで認識を深めるだけの方針や体制が、アメリカでは整備されていることの意義にも注意を喚起したい。

もう一つの特徴として、学校の授業での教材や指導の相対的な非重要性、あるいは学校の授業以外での交流や対話および学校の外側、すなわち家庭、地縁・地域社会における交流や対話の相対的な重要性を挙げたい。それは、単に後者について語るインフォーマントの数が多いという量的な比較によっても確認できるが、むしろそれぞれの語りの内容の質的な豊かさによって裏付けられるべきものである。教室の授業以外の場

での「人種」・「黒人」に関する語りの内容は非常に濃く、深く、かつ多様である。日本人インフォーマントの語りが断片的かつ皮相的であったのと顕著な対照関係にあるといえるだろう。日本人インフォーマントの語りは、「黒人」に対するポジ対ネガの印象度という一元的なレベルで要約し得たが、アメリカ人インフォーマントの語りは、次第に発展し、深まる、次の三つのレベルにおいて展開したといえることができる。

まず、多民族国家という枠組のなかで、必然的に生じる「他者」との遭遇を契機として、その時に必然的に生じる「相違」に対する注意の喚起や意識の動きのレベルがある。自己と「他者」との相違を認識し、理解する際に用いられる言葉・概念が「人種」であり「黒人」であったことは、インフォーマントが共通して指摘するところである。自分は人種的に誰で、何者なのか？ その「他者」は人種的に誰で、何者なのか？ 自己と「他者」の差異を、どのように解釈し、説明するのか？ これらは、いずれも多文化教育の課題そのものである。だがアメリカ人は、義務教育の現場で取り上げられるずっと以前から、家庭で、ピアグループ内で、あるいは近隣居住区内でこの問題に直面する。

しかしインフォーマントの語りは、こうした視線や意識の動きと、認識枠組の形成が、自己対「他者」という個人の次元に止まらず、自己を含む集団（エスニシティや人種）対他者を含む集団（同）という、より集合的な次元にまで到達し、これを包含するものであることを窺わせる。

この時に、キング記念日や黒人史月間など、エスニシティや人種に個人を連座させ、集合の一部としての意識を高揚させる仕組や制度が効果的に作動することも忘れてはならない。「黒人かどうかは社会的にとっても大きな区別で、記憶の始まりと同じくらい早くから、理解し、身につ

けていたもの（エドワード）」との発言からもわかるように、差異は個人のものでありつつ、それだけにとどまらず、「社会的に大きな区分」として与えられ、受け止められる。この区別は、「アフリカ系アメリカ人が黒人なのよ（アンナの母）」という言葉の底流に潜む諦観あるいは憤懣にも窺えるように、当事者に有無を言わせない、権力的な圧迫や拘束を伴うものでもある。

そして第三のレベルは、こうした集団間の差異をどう解釈し、位置づけるかという意思の動きと関わるものである。インフォーマントの語りは、幼少期に始まる「人種」や「黒人」との遭遇やその習得の段階で、自分たちが、集団を分別するだけでなく、優遇や冷遇、尊敬や軽蔑、包摂や排斥など二律背反的な感情をもって序列をつけ、差別する行為に晒され、あるいは加担させられることを窺わせる。「やめときなさい、そこへ行くのは」という人種差別的な言辞を祖父に浴びせられたジャックと「あの子は黒人よ」、「うまいわ」、「速いわ」との黒人身体能力礼賛に組み込まれたスーザンは、いずれも差異を解釈して、集団を上下関係に位置づけることを強要され、あるいは奨励されていたのである。

日米インフォーマントの「人種」・「黒人」概念との遭遇とその習得に関する時期と状況にみられる以上のような差異は、「黒人身体能力神話」の浸透度の違いを説明する上でどのような意味を持つのだろうか。本論を締めくくるにあたって、この点を検討したい。

むすびにかえて

— 児童心理の発達と多文化教育の可能性と限界 —

幼児期の人間の心に、なぜ、いかにして人種偏見が形成されるのかは、

過去数一〇年間、児童心理学者を虜にしてきたテーマの一つである。諸々の学説の中では、フランシス・アブードによる六歳から八歳までの時期に大きな転換期を措定する理論が、種々の批判を浴び、修正を施されつつ、今日まで一つの定説として支持を受けているようである。³⁷⁾

アブード説の概要は次の通りである。かつて幼児・児童の心は、もともと無垢および真白のキャンパスのようなものであり、発育過程で受ける刺激や情報によって心理が作動し、偏見が発生し、発達するものとみなされていた。しかし実際には「真白なキャンパス」のような心はどこにも存在せず、成人と同じように、幼児は幼児なり、児童は児童なり（そしておそらく乳児でさえ乳児なり）の（その起源については諸説あるにせよ）偏見を抱き、成長に伴って単線的に強度を増すのではなく、ある年齢期に弱化されたり、強化されたりしながら、いわば蛇行的な曲線を描きつつ偏見が形成されることがわかってきている。四、五歳までに、物事を認識する能力は固まるが、他者に対する人種的な視点や姿勢および偏見は固定されず、混沌とした状態にある。ところが、だいたい六歳から八歳までの時期に一貫して偏見は強化される。しかし、（個人差はあるにせよ）九歳、一〇歳以降、自我が確立し、合理的な思考が芽生えるに伴って、教育の影響を受けつつ、偏見は弱化される傾向を示すようになる。以上のような心理の発達あるいは変化は、文化を越え、かなり普遍的に確認し得る現象であるとされる。³⁸⁾

本論の関連からいうと、日本人インフォーマントの経験においては、偏見が強化されるという六歳から八歳の時期に、一部の人が「黒人」と遭遇するだけで、ほとんど全員が「黒人」の存在を位置づけるための枠組としての「人種」とは遭遇していない状況におかれている。それゆえ「黒

人」に対する視線や姿勢は定まらず、二律背反的な言説と表象の中で、混沌とした、あるいは混乱した状態にあるといえる。日本人インフォーマントは、合理的な思考が可能な年齢に達してから、「人種」を説明し、定義するカリキュラムが導入されるに伴って、「人種」および「黒人」を認識する枠組を確立させるのである。その意味において、小学校後半、あるいはそれ以上に中学校における教育の意義が大きいことになる。

これに対し、既にみたように、アメリカ人インフォーマントの経験においては、六歳から八歳の時期に、多くの人が「人種」と「黒人」いずれの概念とも遭遇し、これを習得し、さらにいうなら個人としての、あるいは集団としての差別的な思考を発動させ、あるいはその発動を余儀なくされている。「人種」や「黒人」に対する意識が負の方向に振れるといわれるこの時期における、二つのインフォーマント集団による経験の格差は、後の「人種」・「黒人」観の形成と、延いては、「黒人身体能力神話」に対する認否の態度を決定する上で、大きな役割を果たすと考えられないだろうか。

ジェームズ・バンクスらの研究が示してきたように、公民権運動以降、米国における多文化教育の進展はめざましいものがある。³⁹⁾ 多文化教育に対する系統的な批判も存在するが、最近の研究は、過去二〇年間の紆余曲折を経て、多文化教育が現在なお有効かつ有益な教育運動として広範な支持を獲得している状況を伝えている。⁴⁰⁾ この運動は、いくつもの問題を含みつつ、多文化化、多文化化しつつある社会の現実に対応し、偏見や差別と戦う装置として、システムとして、今現在も稼働中であるといえよう。しかし本論が明らかにしたように、アメリカ人インフォーマントは、多文化教育が本格的に発動するよりも早い時期に、つまり人種の偏

見の反動期にあたるまさに六歳から八歳という年齢において、すでに人種主義のドグマの洗礼を受けている。多文化教育の貢献がいかに大きいとしても、それが空白な心に、反偏見、反差別の思想を吹き込むというよりも、すでに一定以上構築された認知と思考・行動の枠組に対して、挑戦的、矯正的に働きかけるものである以上、その影響や効果は、留保つきのものとならざるを得ないだろう。多文化教育は、真白なキャンパスに新しく絵を描き込む作業ではなく、すでに下絵のあるキャンパスに彩を加える作業であるにすぎない。醜い下絵を美しくすることが期待されつつ、醜さを再生産したり、下絵をさらに歪んだものにしたたりする可能性さえ否定できない。こうした観点からも、多文化主義の可能性と限界は再検討に付されなければならない。

アメリカ人インフォマンントの経験から推し量る限り、多文化教育は、すでに土台がある思考の枠組に対する対抗手段や戦略として位置づけるべきである。現実の社会で存続する人種差別・偏見の現実に鑑みるなら、その成果を過大に評価することは控えざるを得ない。初等教育以前に形成された情念や概念に基づく精神性あるいは意識の全体にどう対処し、立ち向かうかが、今後多文化教育に与えられるべき大きな課題である。これに対して、日本人インフォマンントの経験は、初等・中等教育カリキュラムの内容と方法が決定的に重要であることを示唆している。各証言からは、教育的言説を獲得する以前の、情念や思考の様式がみえてこない。アメリカ人インフォマンントとの比較によって、この点は明らかにされた。それゆえ「人種」や「黒人」に関する教育の位置づけと内容に期待できるものは少なくないといえる。

このような理解を敷衍するなら、「黒人身体能力神話」に対する認否

のダイナミズムは、アメリカ人インフォマンントの場合、幼い時期の経験を通じて「人種」・「黒人」とは何か、その差異をどう理解し、どう対応すべきかについての情報を与えられた時点で、一定以上の方向性を指定される可能性が高いといえる。反対に日本人インフォマンントの場合は、同じ時点では、方向性や価値志向は決定されず、その後の教育経験やメディアからの情報に委ねられる可能性が高いといえるだろう。

註

(1) 以下、言葉および概念として「人種」と「黒人」を用いる場合は「」付きで記述し、「人の区分」という意味での「人種」および以下注7で定義する意味での「黒人」として用いる場合は、「」を外して表記するものとする。本来であればそれぞれが宿す問題性ゆえ、一つの語には、いかなる場合も常に「」を付すべきであるかもしれない。ここでいう問題性は、たとえば「人種」というカテゴリーおよびこのカテゴリーによって区分される「黒人」に科学的根拠は認められないとする、今日の自然・社会科学者多数派による批判に反映されている。しかし本論は、言葉および概念としての「人種」・「黒人」と、「人の区分」という意味での「人種」および以下注7で定義する意味での「黒人」を区別するという便宜的な配慮から、後者の使用の際に「」を外して表記するものとする。

(2) 二〇一〇年バンクーバー冬季五輪大会において、上村愛子はメダル有力候補の一人として最初に登場したために、メディアの注目を一身に浴びる結果となった。大会を終了して、結局日本選手団の獲得メダル数は銀三個銅二個にとどまり、開催前の期待を裏切るかたちとなった。

(3) 上村は身長一五六センチ、体重五一キロで、日本人女性として平均的な体格である。これに対しメダリストのハンナ・カーニー (Hannah Kearney) は身長一六八センチ、体重六八キロ、銀メダリストのジェニファー・ハイル (Jennifer Heil) は身長一六二センチ、体重五五キロ、銅メダリストのシャノン・バーク (Shannon Bahrke) は身長一六三センチ、体重五八キロである。上位三者はいずれも身長と体重でかなり上

村を上回り、横にならぶと一回り大きく見える。

- (4) NHK番組『追跡A to Z:金メダル遺伝子を探せ』(二〇一〇年二月一日放送)。この番組は、ゲノム研究によって明らかになりつつある遺伝子の構造から、運動能力の優劣を判定しようとする最近の動きを追跡する。以下、要点を抜粋する。一番目の染色体に位置するATCN3遺伝子の特定の部分の型に注目が集まっており、ここがCC型の人は、特殊なたんぱく質を生成する能力を有し、このたんぱく質は短距離走の際に筋肉繊維が高速で収縮しても耐え得る強さを生み出すという。これに対し同じ部分がTT型の人は、そのような瞬発力に恵まれていない代わりに、長距離向きの持久力を有するとされ、マウスによる実験がこれを裏付けているという。「スプリンター王国」として知られるカリブ海のジャマイカでの調査によると、実験に協力した一〇〇人を越える陸上選手に占めるCC型の割合は七五%と高く、TT型は二%と低い(折衷型のCTが二三%)。これに対し、国際ハップマップ計画によると日本人に占めるCC型の割合は一八%、TT型は二二%、CT型は六〇%である。このようなデータを根拠に、ジャマイカ人と日本人との「人種的」な差異をほのめかし、短距離走における実績の差異との因果を暗示している。

- (5) 本論に先行して執筆した拙稿では、二〇〇九年夏のベルリン国際陸上大会時に活発に議論された本質主義に言及した。「この間、日本の私的・準公的な言説空間では、ジャマイカ勢の圧倒的優位を可能にする文化的・歴史的要因を究明しようとする一部の努力を圧倒するかたちで、「肌の『黒い』人＝黒人」の強さや速さは生まれつききの要因によるものではないかという、本質主義的な憶測が飛び交った。」(注13の拙論の冒頭を参照)今後、二〇一〇年夏のサッカーW杯、二〇一二年のロンドン夏季五輪大会の際にも同様の言説空間が発生することが予想される。

- (6) 本プロジェクト関連で最初に発表した次の拙稿を参照。「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる―概念規定と方法論を中心に―(『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第四号二〇〇九年)。

- (7) 本論は、「黒人」を、「アフリカに出自を有する人およびその子孫で、英語の『ブラック (black)』に該当する人々」と定義する。黒人の中でも、一七世紀から一九世紀にかけて全盛を迎えた奴隷貿易によってアフリカ大陸から南北アメリカ大陸へと強制的に移送されたアフリカ人の子孫には、一部のスポーツ競技種目において傑出した役割を果たしてきた、つ

まり「黒人身体能力神話」の主役として活躍してきたものが少なくない。歴史を振り返るなら、これらの人々の呼称として、「ネグロイド (Negroid)」「ニグロ (Negro あるいは negro)」「有色人 (Person of color)」「アフリカ系アメリカ人 (African American)」など様々な表現が用いられてきたことが知られている。いずれも、時代の文脈の中で政治的・学術的・社会的に批判を受けた経緯がある。

- (8) 「神話」の歴史性を検証する作業では、特に一九三〇年代にその起源を求める解釈が有力視されているが、こうした先行研究の成果を視野に入れたつ、さらに踏み込んだ分析が要請されている。この立場に立つ研究として筆者は、科学研究費補助金による基盤研究C「アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対抗言説・戦略」および武蔵大学総合研究所助成プロジェクトA(研究テーマ:アメリカ合衆国における運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響)に取り組んでいる。後者が日本における神話の受容を踏まえた上で、アメリカにおける受容と批判的拮抗関係が及ぼす社会的影響に焦点を当てるのに対し、前者はアメリカにおける批判側の対抗言説・戦略が、神話をいかに覆そうとしているかを分析することをねらいとしている。なお、ここでいう第一の立場からの成果として次がある。拙稿「黒人身体能力」と水泳、陸上競技、アメリカンスポーツ―「神話」の歴史性を検証するための試論的考察として―(『武蔵大学人文学会雑誌』第四一巻第四号二〇一〇年)。

- (9) ここで問われるべきは、「神話」の歴史性や時代的文脈におけるその性質であると同時に、否それ以上に、「量的」あるいは「比率的」に極端に肯定的な態度が強い展開のありかたである。たとえばアメリカでは、人種主義に対する警戒や統制ゆえに「神話」はタブーと化し、少なくとも公的な舞台で認知されることは皆無といってもよい。他方日本では、人種主義に対して比較的鈍感な文化的土壌も手伝って、「神話」が一方的に承認されることはあっても、批判的観点から俎上に載せられることは滅多にない。実際日本では、指導的立場にあるものでさえ、「神話」を前提として発言することが多い。陸上短距離種目のコーチングでは、「黒人の天性」に対抗するには、日本人は「技能(スキル)」を磨く以外にない」と教えられると聞く。「黒人だから強い」という言説に潜む人種主義を指摘するだけで「褒めてなせ悪い」、「事実だから仕方ない」といった反論を受けることも少なくない。

(10) 拙稿「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる」六一―一頁参照。

(11) 同右、一九一―二二頁参照。

(12) 拙稿「黒い肌の『異人種』との遭遇―『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として―」『武蔵大学総合研究所紀要』第一八号二〇〇九年。

(13) 拙稿「日本社会における『黒人身体能力神話』の受容―『人種』／『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に―」京都大学人文科学研究所『人文学報』第一〇〇号(二〇一〇年出版予定)。

(14) 本節に限って、執筆の時期を同じくした『京都大学人文科学報』に発表予定の拙論(注13参照)と重複する記述が少なくないことを断わっておく。立論のための舞台設定の役割を果たす節として、二つの拙稿にとつて共通の位置を占めることがその理由である。後節の内容が全く異なるものであることはいうまでもない。

(15) 「言葉または概念」としたが、ここでは「人種」や「黒人」の記号としての側面を「言葉」として捉え、こうした記号が表象するものの内容つまり「事物の本質的な特徴とそれらの連関」を指すものが「概念」である。本論では、両者に区別をつけることにあまり意味はないので、以下では主として併記して用いることにする。また、以下で定義するように、言葉としての「人種」と「黒人」を最初に聞いた契機に「遭遇」し、それ以後最初に使う時点で、これらの語を「習得」したものとみなす。筆者自身の経験である。

(16) 日本人インフォーマントの経験は、まず「黒人」と遭遇し、それからこれを習得し、その後「人種」と遭遇し、それからこれを習得するのが多くに共有されたパターンであることを示唆する。一つのエピソードは、やや年齢が低いとはいえ、インフォーマントにみられるパターンを的確に反映しているといえる。詳しくは京都大学人文科学研究所『人文学報』の拙稿を参照。

(18) Thomas F. Gossett, *Race: the History of An Idea in America* [New Edition] (New York: Oxford University Press, 1997), xv-xvi を参照。

(19) 「人種」という言葉を聞いたことがあるか」に対して「はい」と答えたものは三四名中三三名(「わからない」一名)、「使ったことがあるか」に対して「はい」と答えたものは二五名(「いいえ」三名、「わからない」六名)であり、「人種」という言葉・概念に対する回答には、予想以上

に個人差があることがわかる。「黒人」という言葉を聞いたことがあるか」に対しては、三四名全員が「はい」と答え、また「使ったことがあるか」に対しては、三二名が「はい」(「いいえ」一名、「わからない」一名)と答えている。この結果は、「黒人」は「人種」よりも回答に個人差が少なく、認知度が高いことを示唆している。

(20) 遭遇と習得の対象として、「黒人」のほうが「人種」よりもはっきりと記憶に残っている確率が高い理由の一つは、まちがいに、記号としての性質の違いと関係している。「黒人」の場合、「黒人」こくじん」という記号表現(シニフィアン)と「アフリカ出自の人」あるいは「肌の黒い人」といった記号内容(シニフィエ)との間に二対一の関係性が成立しやすいのに対し、「人種」の場合は、「人種」じんしゅ」という記号表現が連想させる記号内容が多元的である。「人種」はかつての学術用語であると同時に普通名詞で用いられる。たとえば一九世紀の人類学が対象としていた、かつての学術用語としての「人種」だけでなく、「あいづは俺と違う人種さ」という表現にみられるような普通名詞としての「人種」もある。後者の場合は、「好み、趣味、性格などの違う人」程度の意味でしかない。「人種／黒人」という言葉を聞いた／使ったことがありますか」という設問に「いいえ」、「わからない」あるいは無回答にしたインフォーマントは、共通して、どの意味の「人種」のことかわからなかったからと指摘している。

(21) 「人種」を「初めて聞いた」時期・小学校以前一名、小学校前半一名、小学校後半一五名、中学校前半八名、中学校後半四名、高校が二名、「わからない」または無回答が三名(聞いたことはあるが、時期を特定できないもの二名が含まれている)。このような原始的な集計に統計の概念を用いるのは不適切かもしれないが、「中間値」は小学校後半である。「人種」を「初めて使った」時期・小学校後半が七名、中学校前半が九名、中学校後半が三名、高校二名、「わからない」または無回答が一名(使ったことはあるが、時期を特定できないもの七名が含まれている)。中間値は中学校前半である。「黒人」を「初めて聞いた」時期・小学校以前二名、小学校前半一〇名、小学校後半一五名、中学校前半五名、中学校後半一名、無回答一名。中間値・小学校後半。「黒人」を「初めて使った」時期・小学校前半八名、小学校後半一〇名、中学校前半五名、中学校後半一名、高校二名、無回答八名。中間値・小学校後半。

(22) 「人種」に関して「学校の授業」でと答えたものは、「聞いた」場合は

二八名、「使った」場合は一九名にのぼり、無回答、「わからない」を除くと、それ以外の状況に言及したのは「聞いた」場合が二名、「使った」場合は一人もいない。

(23) 日本人インフォーマントの語りを、黒人に対する印象の良し悪しで評価すると、肯定的六件、否定的五件、中立的七件となる。肯定的な事例は主としてメディアを通じてのものであり、否定的な事例は主として実際の間関係(友人、家族)でのやり取りからのものである。遭遇と習得の状況によって評価が偏る傾向が顕著であり、日本人の黒人観が分裂的であると主張を裏付けることができる。

(24) 一例としてエイコという日本人インフォーマントの証言を引用する。「昔アパートに住んでたんですけど、あたし全然おぼえてないんです。その時、一階に住んでたらしいんです。あんまり会わなかったんですけど。引越してから、『えっそうなの』みたいな感じでした。：幼稚園くらいまでです。そのときは知らなかったんです。近所づきあいとかは、あんまりありませんでした。後になって、ただ単に話題の一部として、思いつ話のなかででてきました。」黒人に対する距離を感じさせる口調は、多くの日本人インフォーマントに共通するものである。

(25) 「人種」を「初めて聞いた」時期を知るために用いた問いは、「When did you hear the word 'race' for the first time?」である。その結果は次の通り：小学校以前三名、小学校前半五名、小学校後半六名、中学校前半二名、覚えていない等五名。一四名が「小学校時代かそれ以前」に該当する。「黒人」を「初めて使った」時期を知るために用いた問いは、「When did you use the word 'race' for the first time?」である。その結果は次の通り：小学校以前二名、小学校前半一名、小学校後半六名、中学校前半三名、中学校後半一名。九名が「小学校時代かそれ以前」に該当する。

(26) 「黒人」を「初めて聞いた」時期を知るために用いた問いは、「When did you hear the word 'blacks' for the first time?」である。その結果は次の通り：小学校以前八名、小学校前半二名、小学校後半六名。「黒人」を「初めて使った」時期を知るために用いた問いは、「When did you use the word 'blacks' for the first time?」である。その結果は次の通り：小学校以前三名、小学校前半五名、小学校後半六名、中学校前半一名、大学一名。「大学」との回答は外国籍の学生によるものであり、「合衆国

において“blacks”と“African Americans”が異なる意味で用いられていることに気づいてから、“blacks”を使うようになった」としている。

(27) 日本の場合については、注22を参照。

(28) 日本人インフォーマントの一人カオルは、小学校三年生のときの経験をこう語る。「私の学年には女の子が二人転校してきました。前から日本にいたらしくて、日本語の勉強はしてたみたいで、普通にペラペラでした。最初は、なじめてなかったんですけど、でもみんな、ものめずらしげで、近寄ってたりして、すぐ仲良くなったと思います。中学も一緒でした。その先はよく知らないです。家に来たことないですけど、近所だったんで小学校のころは遊んだりしていました。」

(29) Jackie Roosevelt Robinson. 一九一九年ジョージア生まれ。ゼネラルマネジャーのプランチ・リックキーに認められ、四七年にブルックリン・ドジャーズでデビューを果たし、現在の二リーグ制が成立して以来アフリカ系アメリカ人として初のメジャーリーガーとなる。その業績を称え、メジャー全球団は彼の背番号四二を永久欠番にしている。九七年はロビンソンのデビュー五〇周年にあたり、当時の大統領ビル・クリントン主催の討論会など、全米で関連行事が催される。一九七二年死去。

(30) 「最古にして最大の犠牲者」とする根拠は、一六一九年オランダの旗を掲げたイギリス船が二〇名のアフリカ人をヴァージニア植民地に移送したとされ、北米イギリス植民地の創成期に奴隷制度の土台が築かれた点、そしてUS統計局(US Census Bureau)の二〇〇七年のデータによると、アフリカ系アメリカ人の総人口は約三七〇万人(37,334,520)で、全人口の一・三八%を占めており、今日ヒスパニック系に非白人エスニック集団として人口最多の地位を譲ったとはいえ、歴史上長く最多の地位を占めてきた点などを挙げることができる。

(31) 「理解語彙 (reading vocabulary)」とは読んで理解することのできる言葉の集まりの「ラフ」「表現語彙 (speaking vocabulary)」とは話すことのできる言葉の集まりのことである。言葉の獲得はまず前者として成され、その後者として成されるという順を踏む。したがって、理解語彙としての成立があつて、その後表現語彙としての成立が来るのであつて、その逆はありえない。「これら二つの経験の間に一定の時間的なズレ」が生ずるとするのは、このためである。

(32) マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の功績を称えて、合衆国連邦政府が定めた国の祭日。彼の誕生日が一月一五日であることから、

その前後に来る一月の第三月曜日に指定されている。

- (33) アフリカ人の全世界への離散(ダイアスポラ)の歴史を顧みるための期間として指定された月のこと。アメリカとカナダは毎年二月、イギリスは毎年一〇月に指定している。

- (34) 一九三〇年代から始まり六〇年代に頂点に達した、マイノリティ、特に黒人が憲法で認められた個人の権利の保障を訴えた運動。

- (35) インフォーマントのサトコの次の言葉に窺えるような、隣人であっても、黒人を遠巻きに見て、自分たちの仲間に加えようとならない姿勢は、多くの日本人に共通のものである。「低学年のころです。たぶんたしかです。F市に住んでたころなので。うちのマンションの上に住んで、黒人系でした。二歳上の姉や母との話に、結構出てきました。うーん、なんか、ちよつと『変わってるとこもあるけど』、なんか『変わってるよね』みたいな。交流はあんまなかったです。ときどき、同じエレベータに乗りました。」

- (36) 「人種」は学校で教わる硬い言葉であるという印象は、次のヨシコの語りによく表れている。「人種という言葉は、確実にというか、意味も、自分なりになんですけど、理解したのは、たぶん、中学校からだと思っ自分でね。中学校一年生から英語の授業もはいつて、語学を学ぶことで、自分とちがう人種の人があるっていうかたちで、確実というか明確になつたと思うんですけど、小学校のときは、人種という言葉が『こういうことだ』ってはっきりはいえないけれど、ただ、映画やなんかテレビとか、そういうメディアを通じてちよつと知つたというかたちだと思いません。」

- (37) フランシス・アブード(栗原孝、杉田明宏、小峰直史訳)『子どもと偏見』ハーベスト社二〇〇五年。

- (38) アブード説については、次も参照。R・ブラウン(橋口捷久、黒川正流編訳)『偏見の社会心理学』北大路書房一九九九年。

- (39) ジェームズ・A・バンクス他(平沢安政訳)『民主主義と多文化教育…グローバル化時代における市民性教育のための原則と概念』明石書店二〇〇六年。

- (40) 松尾知明『アメリカ多文化教育の再構築…文化多元主義から多文化主義へ』明石書店二〇〇七年。